

2005 年度卒業研究

- 要 約 -

学籍番号	氏名	卒業論文タイトル
10214018	加藤安耶	「人・森林・医療をめぐって 森林療法の可能性」
10214034	佐藤友子	「共通感覚を通じた感性の覚醒」
10214036	澤史子	
10214053	谷本悠一郎	「豊かな心を育成するための環境教育 - 学校教育の視点から」
10214058	中岡生瀬	「『からだ』が持つ力 - 生命の全体性への気づき -」
10214059	網岡修丈	「『個性』をのばす教育の展開 - 環境教育を通じて -」
10214064	長尾知里	「レイチェル・カーソンに学ぶ自然との共生」
10214074	野田かおり	「学校教育における『知恵』の陶冶」
10214095	松村真里	「里山保全を通じた環境問題の解決にむけて - 生活の場としての里山と環境教育をめぐって -」
10114075	中尾有希	「心身相関を基盤にした『健康』をめぐって」

はじめに

第1章 日本人と森林の関係

第1節 日本の森林の特性

第2節 日本人の自然観

第3節 日本人の森林の生活

第2章 森林の現状と見直し

第1節 生態系における森林の役割

第2節 ライフスタイルの変化による森林破壊

第3節 「感じる」ことの大切さ—森林の復元に向けて—

第3章 医療観点からの自然の活用—森林療法を手がかりに—

第1節 都市化から引き起こされるストレス

第2節 ドイツに学ぶ森林療法

第3節 日本における森林療法の可能性—自然休養林の活用—

おわりに

要約

人間の長い歴史を振り返ってみると、人間は自然と共存し相互依存することなしで生き延びてはこれなかった。そして、特に私たち日本人の生活に密接な関係があったのが森林である。また、森林を構成している木やその他の植物、動物などは日本人にとってかけがえのないものであった。あるときは、森は神として崇められ、またある時は、森はその一部である木を木材として与えてくれたり、木の実やきのこなどの食糧を与えてくれたりした。そのように、森は我々の生活を様々な方面から支えてきてくれたのである。

そこで、今回私は自然の中でも特に密接なかわりのある「森林」について着目して論じていきたい。1章では、今では失われかけている日本人と森林の本来の関係について「森林の特性、日本人の自然観・生活」という面から論じる。2章では、森林の現状・役割をふまえ、森林の復元に向けてのひとつの手がかりについて考えていきたい。そして3章では、現代の日本の問題をふまえ、ドイツの森林療法を手がかりとして今後の日本における森林療法の可能性について述べていく。

人間は、本来は自然の一部であり、すべてのものは同等であった。誰が強いわけでもない。お互いが依存しあう形でうまくつりあいがとれていたのだ。このことは、人間の長い歴史のなかでのまぎれもない事実なのである。

現在の日本は高齢社会となってしまった。産業革命のような成長の時代は終わり、これからは少しずつであるが減退していくのである。このような時代であるからこそ、もう一度人間の本質を見直し、自然そして森林とのかわりを見直すことが一番重要なのではないか。

はじめに

第1章 現代社会における感覚の役割

第1節 五覚のバランスの喪失

第2節 第2節 視覚優位の現代社会

第3節 第3節 触覚の回復

第2章 「触覚」が心身に与える影響

第1節 触覚の特徴

第2節 第2節 スキンシップをベースとした心の形成

第3節 第3節 統合する「場」としての身体感覚

第3章 「同調」から「共感」へのこころみ

第1節 自己と他者の心身への気づき

第2節 第2節 身体の広がり

第3節 第3節 人と人との一体化 - 共感による作用 -

おわりに

<要約>

近年携帯電話やインターネットの普及によって誰もが情報を瞬時に簡単に得ることができるようになっている。それらは、情報発信や受信、コミュニケーションの手段として現代社会に欠かせないものとなっている。しかし、間接的なコミュニケーションにより人間関係のバーチャル化が進行し、身体をともなう密度の濃いコミュニケーションが行なわれなくなってきた。私たち人間も動物の一種である以上、身体感覚をともなわない経験ばかりしていると、こころに偏りが生じてくるのではないだろうか。相撲や押しくらまんじゅうといった日本に古くから伝わる遊びにはスキンシップを自然に用いたものが豊富にあった。みんなで身体を通して何かをする体験というのが人と人とのコミュニケーションの原点にあると思われる。「触れる」ことによって、相手の心と身体のあり方についてそして自分の身体と心のあり方について気づくことができるのではないだろうか。また、このように人と触れ合うことによって相手も同じ身体を持つ人間であることを実感することは、共感の基礎となるのではないだろうか。視覚優位の現代社会であるからこそ触覚の回復の重要性を再検討することが必要だろうと感じるとともに、五感のバランスを見直すのにヒントとなるのではないだろうか考える。また、独立した触覚としてではなく、五感と結びついた身体感覚ということで、五感を統合する共通感覚としての「場」としてもとらえていき、現代人が自己の心身を見直し、他者の心身への気づき、共感するこころについて考察していきたい。

第1章では、日常生活における感覚(五感)の喪失について述べ、現代社会のバーチャル化におけるコミュニケーションの現状や問題点をとりあげ視覚優位の世界における触覚の必要性和回復について述べていく。第2章では、触れることの意味や特徴、触覚を用いたコミュニケーションであるスキンシップをとりあげていく。また、触覚が「場」としての身体感覚についてふれていきたい。第3章では、心身相関とバイオリズム、そして対他的空間を通じて人と人との身体をとらえなおし、身体の広がりを通して「同調」から「共感」へのこころみについて述べていき他者の心身への気づきや他者との関係性について述べていきたいと思う。

はじめに

第一章 アニマル・セラピーとは何か

第一節 アニマル・セラピーの定義

第二節 アニマル・セラピーの歴史

第三節 動物のセラピー適性

第二章 人間に与える動物の治療効果

第一節 施設・病院におけるアニマル・セラピーの治療効果

第二節 乗馬療法による治療効果

第三節 イルカ・セラピーによる治療効果

第三章 アニマル・セラピーの発展のために

第一節 日本の現状

第二節 リスク管理の必要性

第三節 生命(いのち)との触れ合い

おわりに

<要約>

人間と動物は古来よりともに暮らし、長い歴史を歩んできた。特に古代においては、身の回りの安全を知らせてくれる、狩りを手助けしてくれるなど、人間は動物に支えられて生きてきたともいえる。また最近の日本においては、高齢化や核家族化が進み、一人暮らしで愛情を注ぐ相手を失ってしまった老人や人に心を開くことのできない若者が増えてきている。このような中においてもわれわれは、ペットという存在に愛情を注いだり、ペットがよき理解者になってくれたりする。このことから考えても、現代においても人間は動物の力を借りて生活しているということがわかる。

最近よく耳にするようになってきた“アニマル・セラピー”。このアニマル・セラピーとは、実際にはどのようなものなのか。第一章では、アニマル・セラピーはどのようにして生まれたのか、また、どこの国で発展してきたのかなど、その歴史や定義などを調べた。そもそも日ごろメディアなどで取り上げられている“アニマル・セラピー”は正確な意味では用いられていない。現在、アニマル・セラピーに関して最大の情報拠点といわれているデルタ協会がアニマル・セラピーの定義を記している。それは、治療のゴールが存在し、人の医療および動物医療の専門家が介在する医療行為を動物介在療法とし、治療のゴールがなく、主にボランティアによって行われるものを動物介在活動とする、というものである。

第二章では、アニマル・セラピーが人間に与える治療効果について考える。アニマル・セラピーといえは、老人ホームや福祉施設を犬や猫を連れて訪問するものがよく取り上げられるが、それ以外にも馬を用いた乗馬療法やイルカを用いたイルカ療法などがある。乗馬療法は主に身体障害者に効果が見られ、イルカ・セラピーは主に自閉症児に効果が見られる。

最後の章では、これからの日本でアニマル・セラピーをさらに広めていくにはどうすればよいか、また、なぜ動物によって人々は有益な効果を得ることができるのか、人と動物とのかかわりからアニマル・セラピーを考えていきたい。

はじめに

第一章 学校教育における環境教育をめぐって

第一節 環境の定義とカテゴリー分け

第二節 環境教育の目的 - 豊かな心を培うために -

第三節 環境教育の内容論

第二章 五感のバランスと共通感覚

第一節 共通感覚論 - 五感を統合する感覚 -

第二節 視覚優位の現代にみる心の環境汚染

第三節 視覚中心から触覚中心へ - 健全な心の環境の回復のために -

第三章 共通感覚をいかした環境教育

第一節 自然体験学習を用いた五感の組み換え

- 自給自足生活の体験学習を通じて -

第二節 自然体験学習の持つ役割 - センス・オブ・ワンダーの目覚め -

第三節 学校教育における「体験学習」による豊かな心の育成

おわりに

<要約>

現在、地球温暖化や酸性雨などの異常気象、水俣病や四日市喘息などの公害問題をはじめとした環境問題が世界規模で起こっており、それらの問題は日々悪化し続けている。それにともない、環境教育が注目され始めている。そこで、将来の担い手を育成して社会に送り出す場である学校教育に重点を置いて環境教育を見ていく。

第一章では、環境教育の実態を見ていく。まず、環境教育を的確に考えることができるよう“環境”という言葉の定義とカテゴリーについて考える。次に、環境教育の目的が“豊かな心を持った人間の育成”であるということを確認していく。最後に、環境教育の持つ特徴的な内容について考えていく。

第二章では、環境教育における体験学習で重要なキーワードとなる“五感”と“共通感覚”について考察する。まず、五感と共通感覚が人々に与える影響を考える。次に、現代社会において、五感のバランスが視覚中心になることにより、“共通感覚の喪失”と“心の環境汚染”が起こっているということを明らかにしていく。最後に、共通感覚の回復と健全な心の環境を保つためには、どのような方法をとればよいのかについて考えていく。

第三章では、豊かな心を育成するために、学校教育で行なわれている体験学習について考えていく。まず、私が甲南大学環境教育野外施設で体験した“自給自足生活の体験学習を例にあげながら、学校教育における体験学習の実際の現場を見ていく。次に、自然体験学習によって目覚めさせることのできる感性であるセンス・オブ・ワンダーについて考えていく。最後に、自然体験学習以外の体験学習にはどのような種類があるのか、またどのようにして豊かな心の育成に関わっているのかを考察する。

環境教育の目的は、持続可能な未来を創造していく豊かな心を持った人間の育成である。そのために、学校教育では体験学習を積極的に行ない、視覚中心であった五感のバランスを触覚中心へと組み換え、共通感覚を回復し、さらには、センス・オブ・ワンダーを目覚めさせることが必要なのである。

はじめに

第1章 医療における課題

1節 現代西洋医学における医療の問題—心身二元論による問題—

2節 なぜ病気になるのか—健康と病気の概念—

3節 “からだ”が表出するバランスの乱れ—現代人の健康をめぐる—

第2章 内なる力の再評価

1節 自然治癒力とは—“からだ”に備わる治癒のシステム—

2節 信じる力—「信頼する心」の効果と諸課題—

3節 新たな医療の要請—代替医療から統合医療へ—

第3章 ホーリズムの観点からの心身論

1節 全体性としての人間—身体のありか—

2節 “からだ”と感情のコントロール—心のありか—

3節 全体性への気づき—自己受容の精神—

おわりに

(要約)

近年、健康に関するテレビ番組や“癒し”という言葉を取り上げた雑誌、広告などをよく目にするようになった。“心身ともに癒される”ことに重きが置かれる現代社会は、大きな問題を抱えている。その一つにストレスから生じる障害を挙げることができるだろう。もちろん、それだけを原因に限定することはできないが、多くの啓発本やストレスに関する言葉が急速に普及してきていることから、この問題は目をそらすことのできない事実であろう。このことは、心が抱えるストレスが身体に影響を及ぼしていることの証拠となるであろう。また、私たちは、病気になった時には西洋医学的な処方を受けることによって病気を治療している。現代の西洋医学は次々に新しい科学技術が進歩し、今まで見ることでできなかった人間の細部を治療できるようになった。しかし、科学的であるあまり、人間の身体を重視し、心やそのつながりを軽視してきた。一方、私たちは治療に頼ることなく病気から回復することを実感として持たずにはいられない。風邪をはじめとする身近なものだけに留まらず、不治といわれていたガンのような病気からさえ、回復するという“奇跡”を耳にしたことがあるのではないだろうか。それは“奇跡”ではなく、からだに備わる自然治癒力が働いているからであるということが知られるようになってきた。そうした状況を受けて、自然治癒力を活かす医療である東洋や伝統的な医療と、現代西洋医学との統合が必要とされ始めている。人間がすこやかに生きるというのはどういうことなのか、真の健康とは何なのかを考えていきたい。第1章では、現代西洋医学における問題点を挙げ、さらには健康と病気に関する概念を整理したうえで、現代社会の問題について考察したい。第2章では、第1章をふまえ、からだに備わる様々な力について考察していく。治癒のシステムである“自然治癒力”や信頼する心の力の重要性について考察した後、これらを活かした新しい医療である、代替医療、統合医療について見ていく。

第3章では、第2章で述べた医療をうまく活用するために、私たち自身のあり方を、全体性というキーワードから見ていきたいと考えている。

はじめに

第1章 学校教育における「個性」の育成をめぐる問題

第1節 「個性」の位置づけと意義

第2節 日本の学校教育における「個性」の変遷

第3節 「個性」と「社会性」の関係

第2章 「個性」を重視する教育について

第1節 「個性」を重視する教育のメリット

第2節 「社会性」の獲得と教師の資質

第3節 環境とのかかわりの中で成長する「個性」と「社会性」

- 環境教育の必要性 -

第3章 環境教育を通じた「個性」教育の展開

第1節 環境教育の意義と「個性」の成長

第2節 環境教育を通じた感性の覚醒

第3節 「個性」教育のための体験学習

- 学校における環境教育の展開 -

おわりに

< 要約 >

現在、「個性」やゆとり教育が重要視され、それにとまなう学力の低下が問題視されている。このような問題が起こった背景には、戦後教育から現在の教育までにわたる日本の学校教育における問題の変遷をみておく必要がある。学校教育における問題がさまざまに論じられてきたが、教育にとって一番重要なものとはいったい何なのであろうか。また、教師から教育を受け成長していく子どもたちにとって、教育とは何であろうか。そして「個性」とはいったいどのようなものであろうか。また「個性を重視する教育」はいったいどのようなメリットと問題点があるだろうか。そして、「個性」をのばす教育の一つの方法としての環境教育について論じていきたい。

第1章では、この論文の「個性」について論じていきたい。第1節では「個性」についての位置づけと意義を論じ、第2節では日本の学校教育における「個性」の変遷を学習指導要領と中教審と教育課程審議会(以後教課審)の答申などからおっていきたい。そして、第3節では「個性」と「社会性」の関係について論じていきたい。

第2章では、「個性」を重視する教育について論じていきたい。第1節では、「個性」を重視した教育のメリットを論じ、第2節では「個性」を重視した教育の問題点である「社会性」の獲得と教師の資質について論じていきたい。そして、問題点を改善するために第3節では環境教育の必要性について論じていきたい。

第3章では環境教育を通じた「個性」教育を「感性」と「性格」の視点から論じていきたい。第1節では、環境教育の意義と「個性」の成長を論じ、第2節では環境教育を通じた感性の覚醒について論じていきたい。そして第3節では「個性」教育のための体験学習について学校における環境教育の展開を論じていきたい。

「個性」を重視する教育にとって問題点を解決する教育方法において環境教育が有効であると考えられる。また、「個性」を重視する教育に向かえば、教育観が変わっていくであろう。教育観が変われば、教育に携わる教師も変わり、教育を受ける子どもたちも変わる。教師と子どもたちが変われば、それを構成する学校も変わる。学校が変われば、社会も変わる。社会が変われば世界が変わる。現在の自然破壊や大気汚染など人類の存亡にかかわる環境問題などがおこななかで世界は変わっていかねばならない。つまり、学校が変わらなければならない。その学校で行なわれる教育において何を重視しなければ

ならないのか。学問などによる知識も重要であるが、「個性」を生かし、のばす教育が一番重要である。われわれは機械ではなく、生きた人間である。人間には、知識だけではなく、人格や感性、社会性など人間を人間至らしめる人間性がある。それを教えるのが学校であり、教育であろう。つまり、教育とは「個性」を育てのばしていくことである。

はじめに

第1章 現代における「知恵」をめぐって

第1節 農村社会における知恵

第2節 社会の変化

第3節 現代人が喪失したもの

第2章 学校教育における「知恵」の獲得

第1節 教育改革にみる二つの方向性 知恵と知識

第2節 「知恵」とは何か フィールドワークの知 を手がかりに

第3節 知恵の実践へ向けて

第3章 知恵の実践

第1節 知恵の実践例 米作り

第2節 「体験」すること

第3節 「知恵」を身につけて

おわりに

<要約>

現在、日本は 60 年代の高度成長期、80 年代の経済安定期を経て、バブル崩壊後も経済的な豊かさを手に入れている。しかし、凶悪犯罪の増加や子どもを標的とした犯罪の増加が示すように、人々のところから「豊かさ」や「生きがい」が失われている。それは、学校教育にも及んでおり、不登校やいじめ、学級崩壊など深刻な問題が生じている。このような問題が生じている背景には、生活を通して人と共同することで「知恵」を身につけていた農村社会が失われたことがある。次世代を担う子どもたちが、現実の問題に対処する力を身につけるために、学校教育において、「体験すること」を中心に、人と共同し、感性を育み、「知恵」を身につけることが必要である。これは、現在の「生きる力」などの教育改革の方向性と一致するものであり、「知恵の陶冶」を展開していくことで、学校・家庭・地域の教育力を高め、子どもたちが主体的に人生を歩む力を身につけることができよう。

はじめに

第一章 ヨーガの思想からアプローチした心身のバランス

1. ヨーガにおける基本的な思想
2. 呼吸を中心とした心身のつながり
3. ヨーガにおける心身のバランス - ヨーガのエネルギーを中心に -

第二章 自然治癒力に着目した心身の健康

1. 日常生活における自然治癒力への着目
2. 自然治癒力 - 自己修復メカニズム -
3. 自然治癒力の展開による心身の健康
4. 心身の健康のための「5つの知恵」

第三章 心身相関から健康へ

- LOHAS をベースにしたライフスタイルからのアプローチ -

1. 心身のバランスとライフスタイル
2. 健康的な暮らし
3. 環境と健康の調和

おわりに

要約

21世紀は「心と環境」の時代と言われている。現代人の心の問題は、社会や環境の問題に起因し、科学万能の時代から知に走りすぎた心のあり方にあるため、知識とそれを運ぶ文字、メール、インターネットの操作に心の働きが限られ、心の理想的な状態である知・情・意の3つのバランスが欠けることから生じる。人や自然と直接触れ合うことの体験は、身体の動きと直接関わり、五感を育み、感性をも導き出される。この心が動くという体験は、身体抜きでは考えられない。身体の可能性を通じて外から働きかけることによって、心に働きかけるという実践的な方法にさまざまなものがある。外と内との一体感から精神性を育むという点から見ても、この心身の統一性が大事であり、内と外のつながりの感覚こそが人間形成にとって最も大きく影響するのではないだろうか。

最近では鍼療法、アーユルヴェーダ医学、アロマセラピー、ボディーワーク、ホリスティック医学などが着目されている。特に、近年世界各国幅広い世代において受け入れられている健康方法にヨーガがある。ヨーガは身体一つだけで実践でき、動きや感覚を通して身体に耳を傾けながら、心を安定させる効果がある。身体のリズムを獲得することで、心の働きを高めることができると言われている。こうした健康への志向は、従来の「病気を治療する」という医学や医療の流れから、「健康を増進する」という予防医学やヘルスケアの流れを反映している。「健康」の定義としては、「健康 (health) とは、完全な肉体的、精神的及び社会的によき状態 (well-being) であり、単に疾患又は病弱の存在しないことではない。Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.」(WHO 憲章前文、1948年)とされている。この「健康」の基本的な考え方に沿って、ヨーガの思想を通じた心身の仕組みや心身のバランスへの影響を検討し、心身相関を基盤にした健康とそれらを基盤にしたライフスタイルについて考察する。

第一章では、日常生活で実践可能なヨーガについて、その基本的な思想をベースにしなが、心身のつながりとバランスについて論じる。第二章では、心身のバランスや健康を考える上で重要な役割を果たす自然治癒力について論じる。第三章では、第一章と第二章を通じて述べてきたヨーガと自然治癒力を中心としなが、心身相関関係について論じ、心身のバランスを基本にした健康な生活やライフスタイル、さらに環境と健康の調和をめざしたライフスタイルのあり方について論じる。以上を通じて、心身相関、心身のバランスをベースにしたライフスタイルの提案として、LOHAS (Lifestyle of Health and Sustainability) の考え方を通じて健康と環境を統合化したライフスタイルについて考察する。